

新 歌人群像

春日井建

没^おちし日輪がのこすむらさき

荻原裕幸



極端な二面性

二〇〇四年五月二十二日、春日井建^{かすがいけん}は、病魔のため、いささか早くその生涯を閉じることになった。享年六十五歳だった。

前衛短歌時代から現在まで活躍を続けた時代の歌人である。一九八〇年代以降、いくつかの短歌の会を通して見て来た春日井建の人物としての印象は、良識ある大人、と言う他にないような、穏やかで、他者に濃やかな気配りをする人だったが、記憶をさまざまにたぐりよせてみると、そうした良識ある大人の表情の奥に、普通ではない何かを感じさせる面をいくつも持っている人でもあった。

いつ頃のことであったか、寺山修司についての話から、ふと競馬の話におよび、無名の馬に目をつけては、その馬が勝つまでひたすら馬券を買い続けるのだと、目をきらきらさせながら、実に楽しそうに語るのを聞いた。はじめは大して損にはならないが、負けたら次はその倍の額を、もう一度負けたらさらにその倍の額の馬券を、ともかく勝つまではどこまでも買い続けるのだという。ギャンブル音痴のぼくにもさすがにそのスリルは理解できた。実際に春日井建が競馬にどの程度のも

りこんでいたのかはわからない。ただ、時折そのような尋常ではない類の話の聞き、良識ある大人と良識の枠を超える人との極端な二面性を抱えているのだということが実感された。

この二面性は、日常会話にもおよんでいた。以前ぼくが春日井宅を訪れたとき、コレクシヨンのヴェネチアングラスをひっくり返しそうになったことがあり、真つ青な顔で言い訳めいたことをあれこれ言っていたら、かたちあるものはいずれこわれるんだよ、などとさうらつと言われた。氣遣いから発したことばだとは思われるが、そんな非日常的な世界観が口について出ることには驚かされた。人物像（しかもぼくの感覚による印象）と作品とは必ずしも直結するものではないが、春日井建の短歌の魅力は、こうした二面性と決して無縁のものではないと思う。

日常を超越して

一九三八年、春日井建は、愛知県江南市に生まれた。高校時代からジャンルを問わず文芸の活動をしていたという。父（春日井瀧）も母（政子）も歌人という環境が影響したのか、一九五六年から父が編集をつとめる結社

誌「短歌」への出詠をはじめ。一九五八年には、中井英夫の抜擢により、総合誌「短歌」（角川書店）に「未青年」五十首を発表した。また同誌の誌上企画のアンソロジー「新唱十人」に参加するなど、前衛短歌の一翼を担う歌人としてデビューすることになった。

一九六〇年、第一歌集『未青年』を刊行したとき、その序文において三島由紀夫は「われわれは一人の若い定家を持ったのである」と、これ以上は表現のしようがないほどのオマージュを述べている。

ちちははのことときれむ彼方ひかり零る
その日美しくわが老ゆべし 『夢の法則』

純潔の時はみじかく過ぎ去らむわれに
透過光するとき汗 同

大空の斬首ののちの静もりか没ちし日
輪がのこすむらさき 『未青年』

プラトンを讀みて倫理の愛の章に泡立
ちやまぬ若きしむら 同

唇びるに蛾の銀粉をまぶしつつ己れを
恋ひし野の少年期 同

両の眼に針射して魚を放ちやるきみを
受刑に送るかたみに 同

引用歌は、第一歌集『未青年』とそれに先

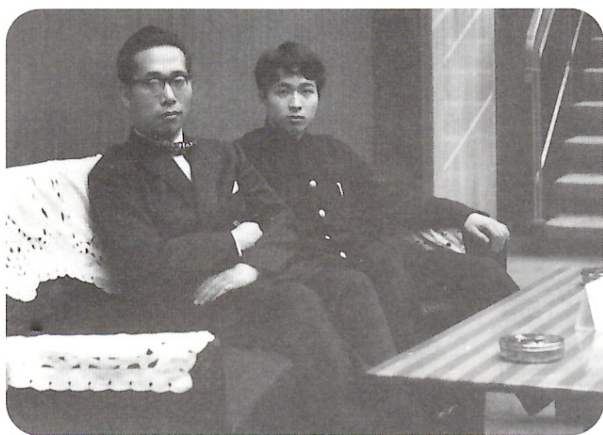


建、23～4歳の頃（1961～2年）

行する初期作品の歌集『夢の法則』に収録されたものである。「未青年」というタイトルが象徴的に示しているように、青年期以前の純潔で痛々しい精神の輝きをモチーフとした作品であり、きらびやかな経歴とあわせ読むと、日常の世界としての匂いがきわめて薄いようにも思われる。たとえば「両の眼に」の一首は、一瞬の情景を強く記憶に刻むための儀式的な行為を描いたものである。谷崎潤一郎の『春琴抄』に見られる佐助の行動が意識のどこかにあるのかもしれない。受刑に向かう「きみ」を、愛情と嫉妬のまざった視点

春日井 建

新 歌 人 群 像



1958年、塚本邦雄『日本人靈歌』出版記念会で塚本と。

で見送っている。ここから、犯罪への憧憬しやうけいを
読みとるのは可能だが、それらは個人の現実
に着地するものではなく、既成の概念や秩序
の破壊といった世界観のレベルで志向されて
いるようだ。短歌史の流れとも重ねあわせて
みると、フォルムを活かした端正な文体なが
らも、ナルシズム、性欲、犯罪などへのや
や歪ゆがんだ憧憬がテーマで、戦後の第二芸術論
への抵抗としての、前衛短歌の実験的試行の
一つであると言うこともできようか。

ただ、これらの歌の持つ日常を超越した印

象は、現在の視点で読むと、そうした文学の

ロジックを実践するためのものであると言
うにはあまりにも無防備で、ピュアで眩まよしい、
という気がする。人物像を作品に結びつけて
読むのは危険だと知りつつも、どこか、良識
ある春日井建のなかに宿る良識を超えたもう
一人の春日井建の声のように読めてしまうの
だ。良識に包まれているからこそ、憧憬とし
て非良識的な世界を志向しているのではない
か。いま論証するすべを持たないが、半世紀
近くの時間を経て、これらの作品のことばが
錯つかないのは、むしろ非文学的な、良識的
日常を背景に強く抱えているからだという気
がしてならない。

底ごもる水鳴りがなべて支配して男盛
りのミシシッピーよ 『行け帰ることなく』
廃品のくるまの山へ血紅の花束を投ぐ
ジエームズ・デイン忌 同

一九七〇年に刊行された第二歌集『行け帰
ることなく』の作品である。『未青年』が抱
える非日常的な印象はさらにきわまり、文体
の上では、様式的な美の追求がいつそう顕著
になっている。二首目、天折したスターへの
献花が、墓でも死亡現場でもなく、死因に関
連する「廃品のくるまの山」になされる。ア

メリカナイズされた映画的風景に、自身の姿
を重ねている。真摯まじしな中意なのかあるいは文
学的なポーズの一種なのか、そのどちらだど
も断言するのはむずかしいが、個人的な感覚
で言えば、一九六〇年代頃の表現が、現在も
同時代的な鑑賞の対象になるとすれば、それ
は文学云々をやや逸れた場で、短歌のフォル
ムと純粹たじに対峙して書かれた作品だと考えて
いいように思う。前衛短歌というレットルを
剥がしてしまったほうが、春日井建の作品を
貫く真摯な思惟の流れが見えやすくなるので
はないだろうか。

『行け帰ることなく』の刊行以後十年ほど、
春日井建は短歌の世界から遠ざかる。一九七
九年、父の死を契機に、結社誌「短歌」の編
集発行人を引き継ぎ、作歌を再開した後は、
みずから前衛短歌のレットルを剥がすかのよ
うな世界を展開する。

前衛短歌の後に

秋到る空の縹へ差し入れて不犯の腕悲
しまむとす 『青葙』

一瞬を捨つれば生涯を捨つること易か
らむ風に鳴る夜の河 同



2002年、サッカー・ワールドカップ仙台・宮城スタジアム行きの電車の中で乗り合わせた子どもたちと。後列中央が建、前列右が妹の森久仁子。

暁闇にひとりの圏のものの隅あかるみ
来るをゆくりなく見つ 同

ひと避けて歩むにあらねひとり歩む虚
を盈たし雪はふりくる 同

一九八四年に刊行された歌集『青葙』の作品である。様式美の追求というスタイルは大きく変化していないものの、そこに流れる思惟が実感として掴みやすいのは、第二歌集以前との大きな違いだ。「秋到る空の纏」の歌では、『未青年』の世界の背景にいたと考えられるもう一人の春日井建を表に露出させている。つまり、現実の自身が普通でおとなしく秩序のなかにおさまっているということをしきり悲しみとして提示する。戒を破ることのない

不犯こそ自身の本来のありようなのだという自覚が、人生の秋の到来に重ねて描かれている。「一瞬を捨つれば」に見られるニヒリズムの否定もまた、もう一人の春日井建なのだと思えていいだろう。

一見『未青年』で展開した世界観を自身で否定しているようにも読めるのだが、必ずしもそうではなく、そもそも『青葙』の一人称が、日常を通して日常の向こう側にあるあれこれを描いたのが『未青年』の世界なのだ、と読むほうがおそらく自然だろう。『青葙』に到ってたしかに作風は変化しているが、『未青年』から『青葙』へと成長したのでもなく、また変化したのでもなく、『青葙』は『未青年』の世界を補完している、と考えればわかりやすいのではないだろうか。

『青葙』以後の春日井建は、作品の制作時期と刊行時期を多少前後させながら、『水の蔵』『友の書』『白雨』『井泉』、そして最後の歌集となった『朝の水』まで、さらに五冊の歌集を刊行した。第二歌集の表題で『行け帰ることなく』と宣言したように、『未青年』の世界に帰ることなく、『青葙』で見出した人生の秋以降の世界を深めてゆく。

第八歌集『井泉』は、入院、闘病、療養を繰り返した時期のもので、全体が病を通して

自身の生と対峙するモチーフに貫かれている。一般に、病を描いた作品は、気の弱りから、どうしても感情に溺れてしまう傾向があるが、ドキュメント風に感情を底に沈めた文体が、ことばにちからを与えている。

常に誰かが咳をしてゐる朝まだき窓を
かすめてつばめが横切る 『井泉』

味のなき食片を噛みなつみつつ遠き花
火のひらくを待てり 同

みづうみはただ平らにて降りつもる月
の光量ひたすら重し 同

しづけさの涯には音があるといふ一日
を椅子に掛けてゐる母 同

前の二首は入院のときの作品、後の二首は直に病をモチーフとはしていないが、いずれも静謐な情景の奥に気持ちのはりつめたような感触があるのは、病を通しての澄んだ心境が影響しているのだろう。ただ、どんな状況にあっても、歌人としての冷静な観察や洞察はまぎれもなく、『未青年』にも『青葙』にもこの『井泉』にも、生涯、短歌の様式美を求め、それを何よりも重んじて支えとした姿勢はしっかりと貫かれている。

(おぎはら・ひろゆき「ラエティティア」)